

## 式 辞

第一次世界大戦の講和会議がパリで開かれた1919年(大正8)年に誕生した西南学院グリークラブは、ここに100周年を迎えることとなりました。

学院とともに歩き一クラブの歴史にとどまらず、西日本合唱界を代表しうる史実を残したことは、OBとして何物にも代え難い喜びであります。また、この歴史的な瞬間に立ち会えることに感謝申し上げます。

戦前、戦中、そして戦後の復興期もひたおきに歌い続けてくれた先輩方から後輩グリーメンが引継いでできたことは、男声合唱をこよなく愛し仲間と精進すること、後輩には物心両面からの協力と激励を惜しまないことでありました。その草創期より、活動の底流には学院の精神的バックボーンである「西南よキリストに忠実なれ」の教えがあり、音楽を通して学院と社会との結びつきの糸口となってきたと言っても過言ではないと存じます。

100年の間には二度の危機と復活がありました。太平洋戦争の終盤、学徒動員等の止む終えない理由により1943(昭和18)年を最後に自らその活動を中止しましたが、学徒出陣したメンバー14名の中で8名が帰らぬ人となる、大きな犠牲を伴った昭和の危機でした。

しかし終戦後、筑豊の地に疎開をされていた石丸寛先生の指導を受けるようになり、1947(昭和22)年初出場の朝日合唱コンクールで優勝し復活を果たします。その時の自由曲が、先生自らが東京のソ連大使館に出向き、ソ連兵の歌から採譜し編曲された本邦初演の「カチューシャ」です。

その後は1968(昭和43)年まで全日本合唱コンクールの常連になり、結果に一喜一憂しながらも輝かしい成績を収めました。

合唱コンクールへの出場を止める少し前の1960(昭和35)年頃より、福永陽一郎、森脇憲三、畑中良輔、関屋晋の諸先生方にご指導をいただき、定期演奏会を中心にした独自の演奏活動に力を注ぎました。最盛期は100名を超すメンバーで多彩な活動を行い、

アメリカ、韓国、ヨーロッパ演奏旅行など国際親善にも貢献しました。

しかし、1996(平成 8)年頃より部員の減少が始まり、ついに2006(平成 18)年メンバーが一人もいなくなり休部のやむ無きに至ったことは、昭和の活動中止とは意味合いを異にする、極めて重大な平成の危機でした。

背景には、就職氷河期や本学に於ける男子学生の大幅な減少などの外的要因が考えられますが、集団で集まって活動を行う学文会系クラブの人気度が低いことや、歴史や伝統を重荷と感じる部員たちの心を、私たちOBがどれだけ理解し支援しようとしていたのか、今後の反省材料としなければなりません。

早速、昭和の危機を体験されてこられた元OB会々長、刀根さんのリードで再興活動が開始されました。1954(昭和 29)年の誕生以来グリー成長の大きな牽引力となってきました、OB合唱団西南シャントゥールが学院行事に参加するなど活動の先頭に立ち、2年後の2008(平成 20)年4月、ニューグリーメン5名の誕生で復活の足掛かりを得ます。2011(平成 23)年には第55回目になる定期演奏会を開催するまでになり今日に至っております。

部員数の拡大には課題を残しておりますが、歌好きの若者たちが厳しい環境の中で練習に取組み、次の100年に向けて始動しています。引続き、活動費の支援、日頃の熱い激励、定期演奏会に顔を出すことなどが、私たちOBの欠かせない役目になります。また、現役グリーメン諸君も希少な男声合唱音楽への理解と関心を深め、その豊かなハーモニーを学院の内外に響かせるとともに、音楽を通して自らの人間性と、学院力を高めるべく研鑽されることを期待します。

最後になりましたが、この長い歴史の中で多大なるご貢献をいただきました、「石かん」こと故石丸寛先生、「陽ちゃん」こと故福永陽一郎先生をはじめすべての方々に深く感謝申し上げますと共に、支えていただきました学院関係者の皆様、ファンの皆様、メンバーのご家族の皆さまに厚く御礼申し上げます。

西南学院グリークラブは本日を契機として新たな幕開けをいたしますが、先の戦争中、学業半ばで出征し再び歌うことを願いながらも戦死した諸先輩方に敬意を表し、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えていくために歌い続けていくことを、ここに参列いたしております歴代グリーメンと共に誓い記念式典の式辞いたします。

2019年9月21日

西南学院グリークラブOB会

会長 黒江量二